

短歌の学習指導の試み

—鑑賞から創作へ—

渡辺 春美

はじめに

伝統文芸としての短歌の学習指導はどのようにすればよいのであろうか。私自身の過去の指導を振り返るとき、次のような課題が浮かんでくる。まず、①短歌の鑑賞指導—これまで短歌の鑑賞指導の方法そのものを生徒に学習させたことはなかった。その方法も明らかではなかった。②鑑賞文—書かせることはあっても、そのための指導はしてこなかった。③短歌の創作—これまでほとんどさせてこなかった。ことばの学習としても、生活と時々感じ考えることを見つめさせる意味においても試みてよいと思われる。また、④短歌への興味・関心—指導が十分ではなかった。次に、⑤学習指導の形態の問題—生徒に自らの力で学習させる形態をとらなかつた。さらに、⑥国語科教育における短歌学習の位置づけ—この点についても実践を基に考えることが必要であろう。以上のような課題を意識しつつ、短歌の学習指導を試みた。以下、学習指導の実際を報告し、考察していきたい。

一 短歌学習指導の概略

(一) 学習指導目標

次の目標を設定した。①②は技能目標、③④⑤は価値目標、⑥⑦は態度目標である。

- ①短歌の味わい方を理解させ、味わい方を応用して短歌を読み味わわせる。
- ②短歌に関する鑑賞文が書けるようにする。
- ③短歌がどのようなものか実感的に理解させる。
- ④短歌に表現されたものの見方、考え方、感じ方を理解させる。
- ⑤短歌を創作させる。
- ⑥様々な短歌を主体的に読ませることによって短歌に親しませる。
- ⑦短歌の学習を通してことばに対する関心を深める。

(二) 学習指導対象

二年六(四一名)・七組(三九名)・八組(四一名)

(三) 学習指導の概略

次に学習指導計画を掲げる。「1導入」から「2短歌の鑑賞」の「(2)展開—応用」までは一学期五月に、「(3)展開—発展」。

「3鑑賞のことはに学ぶ」は、二学期一月に行つた。また、「4短歌の創作」・「5冊子「短歌を学ぶ―鑑賞と創作―」の作成」は、三学期二月に行つた。

1 導入(二時間)

①短歌の学習計画の説明。②学習のためのアンケート。③木俣修「短歌のために」。

2 短歌の鑑賞

(1) 展開―基本(三時間)

①短歌を読む―短歌の味わい方。②「その子二十」(『国語II』筑摩書房刊)から六首を選び授業を通して鑑賞。

(2) 展開―応用(一時間)

①「その子二十」(同)から七首を選出。②七首から二首を選び鑑賞文の作成。③作成した鑑賞文と大岡信「折々の歌」の鑑賞文との比較。

(3) 展開―発展(三時間)

①短歌を選ぶ―各グループ一〇首。②私たちの選んだ百首の作成。③鑑賞のことはに学ぶ

大岡信著「折々のうた」第十までの一〇冊を四部四〇冊揃える。生徒は各冊の一つの季節から気に入った短歌を選び鑑賞するとともに、大岡信の鑑賞文に学ぶ。

4 短歌の創作(二時間)

①短歌の創作。②友人による批評。③短歌の推敲。

創作のための参考として、近藤芳美著「無名者の歌」抄(『現代国語1 二訂版』一九七八年十一月 筑摩書房刊、中原

和男「わけもなく過ぎゆく時は」(『波』5号一九七八年一月 大手前へ中)高等学校文芸部刊)を配布した。

5 冊子「短歌を学ぶ―鑑賞と創作―」の作成(一時間)

(四) 関連学習

また、短歌の学習指導に関連して、折にふれて紹介した短歌の一部を例として掲げれば、次の通りである。

1 「与謝野晶子短歌文学賞 青春の歌 入選作品 河野 裕子 氏選」

①人ごみはなぜかワクワクしてしまふ目指すバルコは坂の向こうに 奥田未央(大阪府立和泉高等学校一年)

②はじめりは海からだった私たちおぼえていますかあの日の言葉 明賀万実(同 定時制)

2 「ハイティーン純情歌集」(ジユ・パンス)一九九三年四月号 高文研発行)

③「いま、理科」といつの間にか覚えておりぬ君のクラスの時間割まで 渡辺伸子(大分 杵築高校二年)

④話すのはいつも我にて君はただうなずくだけで会話は終わる 同右

3 「朝日歌壇」

⑤百円でノートと鉛筆五人分世界の子が待つユニセフ募金 (上田市) 中島絹代

⑥地下鉄の長い階段のぼり来てやっばり君が好きだと思おう (札幌市) 本間 恵

4 単元「『むなしさの時代』をどう生きるか」(二学期後半)の導入として、次の歌を扱った。

① 3341と数字浮き出るポケベルを机上に授業を受ける女生徒 「朝日歌壇」(千葉市) 愛川弘文

② 「もつともつといっぱい話そう」と十歳の投書載りみんなさびしい日本 同右 (上田市) 武井美栄子

①か②かどちらかを選び、それぞれの歌の「さみしさ」がどのようなところから生じたのか想像し、感想もまじえて書きま

とめさせた。

5 「山月記」の授業で、まとめとしての選択課題の一つとして、「短歌二首―ある場面における李徴の気持ちを中心に」を課した。

二 短歌鑑賞指導の実際

(一) 短歌学習指導の導入

1 学習計画の説明

最初の時間に、計画表を配布して計画を説明した。学習に見通しを与えるためである。この段階では、短歌の創作は計画してはいなかった。

2 短歌の学習指導のためのアンケート

指導の参考にすることを考え、次のアンケートを実施した。

短歌の学習のためのアンケート

- 1 あなたは短歌に親しみを感じますか。
ア・とても感じる イ・感じる ウ・あまり感じない
- 2 あなたは短歌を本や雑誌や新聞などで、読むことがありますか。
ア・よく読む イ・ときどき読む ウ・読まない
- 3 あなたは短歌を作ったことがありますか。
ア・よく作った イ・作ったことがある
ウ・作ったことはない
- 4 あなたは、どのような歌人に作りましたか。
アイと答えた人は、どのような歌人を知っていますか。
- 5 あなたは、短歌を読みわうとすればどのような点に気をつけたいと思いますか。箇条書きで答えてください。
- 6 あなたは、短歌の学習で、どのようなことにふれてほしいと思いますか。箇条書きで答えてください。

(注―回答欄省略)

以下、アンケートの結果について考察したい。「1」によれば、短歌に親しみを覚える者は、「ア」「イ」の計で二七%あった。比較的高い数値だと考える。「2」は、「ア」「イ」の計で二四%、約四人に一人が、短歌に目を向けるということである。これも高い数値だといえる。しかし、なお「1」で八三%、「2」で七六%の者が、「あまり感じない」・「読まない」としている。ここ

に、短歌に親しませることを指導目標にする意義が見いだされる。「3」では、計五八%の生徒が、多く小・中学校の授業で短歌を創っていることが分かる。

「4」によれば、挙げられていた歌人は、教科書に登場するものが全てだといつてよいくらいである。生徒の短歌学習が、教科書を中心になされ、広がりや欠いているとも見える。さまざまな歌人の短歌、市井の人々の短歌に触れる機会を持たせてもよいであろう。その方が、短歌が、人々の生活と共にある伝統文芸であることが理解され、おのずと身近に感じられるであろう。

「5」では、短歌を読み味わう際のポイントがほぼ出ていた。課題は、生徒に短歌の読みの方法として、読みの過程（手順）を系統化して理解させることであろう。「6」を答えた者は少なかつた。中では、歌人の生涯、作歌の気持ちと背景などに関心を持っていることが理解される。

アンケートの結果を考察したが、ここから、①短歌に親しませる、②有名歌人の短歌にとどまらず、幅広い層の歌人の短歌に触れさせる、③短歌が人々の生活とともにある伝統文芸であることと理解させる、④短歌の読みの過程を系統化して理解させる、ということが課題として見いだされる。

3 木俣修「短歌について」の学習

短歌の学習に際し、①短歌に親しませるとともに、②ア・短歌とは何か、イ・短歌の表現の特色、ウ・短歌を読む意味、エ・短歌を詠む意味についてとらえさせたいと考えた。

「短歌について」には、次のような高校生の短歌が一五首紹介さ

れている。このような短歌に接することで、短歌に親しませたいと考えた。一五首の内七首を掲げる。

①灯を消せばいまひたむきに学びたる数学の文字闇にただよ
う

②勉強のあいまいまに聞くトロイメライしばしはわれを空
想家にする

③白い富士のよく見える朝の屋上にて「スランプはだれにも
あるさ」と友はつぶやく

④冬陽さすテーブルの上の実験用のうさぎぼそぼそと青菜を
かじれり

⑤汗ばみて荒く息つく友の手に試験管今し反応せんとす

⑥父のことをさまざまに自慢しておれば父の亡き友の悲しき
目にあう

見ぬ

(二) 短歌の鑑賞指導—基本

1 短歌の鑑賞の方法

短歌を読み味わう方法として、次のプリントを配布し、1〜7の順序に従って短歌の鑑賞指導を試みた。

短歌を読む—短歌の味わい方

1 音読

- リズム・調べ
- 2 歌意の理解
- 3 話者の状況の理解
 - 位置・立場・状態・視点・場面
- 4 話者の心情の把握（仮説として）
 - ① 心情を表現した語句 ② 句切れ ③ 体言（連体形止め）
 - ④ 助詞（かも・かな・）、助動詞（けり）
- 5 表現の検討
 - ① 詠まれている素材（イメージ化）
 - ② 表現技巧（比喩・対比・象徴・擬人）
 - ③ 心情表現（4—①—④も含む）
 - ④ イメージ語—視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚
- 6 話者の心情の感得
- 3・4・5をふまえて
- 7 作品のイメージの統合
 - 音読・朗読

授業では、「その子二十」から次の短歌を扱うことにした。先に掲げた鑑賞の方法にしたがって鑑賞を行った。

その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな
与謝野晶子

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢うふ人みなうつくしき
春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ
北原白秋

しみじみと物のあはれを知るほどの少女となりし君とわかれぬ

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は死にたまふなり
齊藤茂吉

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

授業は、次のように行った。具体例を与謝野晶子の短歌「その子二十」に取る。

板書計画画	女性らしさ = 豊か・長く美しい髪 二十 櫛に流るる黒髪 —象徴— おごりの春—誇らしさ
発問・指示・留意点	①音読 ②ことばの意味—歌意 ③話者の状況—その子と話者との関係 ④話者の心情—うつくしきかな ⑤表現 ア・二十 櫛に流るる黒髪 おごりの春 イ・黒髪とおごりの春の関係は

—
うつくしきかな—諸歌

清水へ
華やかな遊里
祇園よぎる

桜月夜——桜の盛り
おぼろ月夜

こよひ逢ふ人

向こうから来る人に逢う

みなうつくしき—はなやかな美しさ

連体止め の発見

参考—会う・遭う・遇う

(三) 短歌の鑑賞指導—応用

1 鑑賞文の書き方

鑑賞文を書かせるにあたり、次のプリントを配布し、鑑賞文の書き方を指導した。鑑賞文は、短歌の鑑賞の方法の順序に従うことと書きまとめられるとして、例文をも示した。

短歌を読む—鑑賞文を書いてみよう

六首の歌を読むことをとおして、「短歌の味わい方」を学習して来ました。次に、その味わい方を生かした鑑賞文の書き方を紹介します。

味わい方は、「1音読 2歌意の理解 3話者の状況の理

⑥ 全体のまとめ

⑦ 朗読

① 音読

② ことばの意味—歌意

③ 話者の状況

④ 話者の心情—みなうつくしき

⑤ 表現の検討

祇園 こよひ

逢ふ（「あう」の意味の違い）

みなうつくしき

⑥ 全体をまとめ

⑦ 朗読

解 4 話者の心情の把握 5 表現の検討 6 話者の心情の感

得 7 作品のイメージの統合」としました。鑑賞文は、この

うち、2〜6を中心に書くといいでしよう。2〜6を整理す

ると、次のようになります。

① 歌意の理解

② 話者の状況の理解

③ 話者の心情の把握（仮に）

④ 表現の検討

⑤ 話者の心情の感得

☆このうち③と⑤はどちらかにすればよいでしょう。

次に例を示しましょう。

その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

与謝野晶子

例一「鑑賞文」

①二十の、梳くと流れる黒髪に象徴される誇らかな青春は、かがやくばかりにうつくしいというのが歌意である。②話者は、少し距離をおいたところから、女性と黒髪にかがやくばかりの青春を感じているととれる。それは、あるいは距離をおいて観た自身の姿であるかもしれない。③「うつくしきかなには、その盛りの青春への深い感動がうかがえる。④「櫛にながるる」からは、つやつやと健康的で美しい、女性のシンボルとしての黒髪が想像され、「おごりの春」からは、自信に満ちた、のびやかな生き方までが伝わってくる。(⑤「うつくしきかな」には、その盛りの青春への深い感動がうかがえる。)

〔本文二四〇字以内〕

以上のように、①～⑤をつづけて文章化すると、右のような鑑賞文が書けます。

2 短歌の鑑賞指導の実際

教科書「その子二十」から、次の七首を選んで示した。

A やはらかに柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

石川啄木

B 馬追虫の髭のそよろに來る秋はまなこを閉ちて想ひ見

るべし

長塚 節

C 白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染ますただよ

若山牧水

D 最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるか

も

斎藤茂吉

E ならさかの いしの ほとけの おとがひに

こさめ ながるる はる はきに けり

会津八一

F たちまちに君のすがたを霧とざしある楽章をわれは思ひ

き

近藤芳美

G マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国は

ありや

寺山修司

この中から生徒に二首を選ばせ、課題プリント(省略)によつて二四〇字以内の鑑賞文を書かせた。その後で、大岡信著『折々の歌』から抜き出したA～G七首の歌に関する鑑賞文を配布した。次に、生徒の書いた鑑賞文と大岡信氏のものと比較させ、その気づきを書かせた。最後に、大岡信氏の鑑賞文から鑑賞のことばとしてすぐれていると思われるものを抜き出させた。

3 生徒の鑑賞文の紹介

次に生徒の鑑賞文を紹介し、その中のいくつかについて考察したい。

A やはらかに柳あをめる

F M男

「鑑賞」①柳がうす青く色づいて来ると、私に泣けといっているかのように、ふるさとの北上川の岸辺が、目に浮かぶようだ。②話者は郷愁を詠んでいる。③話者は話者のふるさとに似た風景を見て、ふるさとのなつかしさを思い、切ない気持ちになってこの短歌を詠んでいる。④「やはらかに柳あをめる」では、少しずつ草木が青くなってくる。さわやかであたたかい感じの春が伝わる。その後の部分で、前半と対比させて、よりいっそう、切なさが伝わってくる。

「比較」自分がこの歌を読んでも、故郷への「憎」の部分は覚えてこなかった。

「優れたことば」泉のように噴きあがってきた望郷の歌が

ほぼ鑑賞文の書き方に示した方法で書いている。②は、話者の状況と言うより、話者の心情の中核をとらえたものとなっている。むしろ③がそれに当たっている。話者の状況として、F M男は、「柳がうす青く色づいて来る」「ふるさとに似た風景」を見て「ふるさとの北上川の岸辺」を思い出しているのとらえている。表現については、四句までと五句とを「対比」と見て、「切なさ」

がいつそう伝わってくるとしている。

「比較」で、F M男は、大岡信の文章を読み、「故郷への「憎」の部分は覚えてこなかった」としている。自らの鑑賞と比較し、さらに検討した上で、なお大岡信のように読めなかった自己の読みを率直に表現している。

「優れたことば」については、優れた表現を見分ける目の確かさがうかがえる。

E ならさかの いしの ほとけの

M M女

「鑑賞」奈良坂の道端の石仏のしたあごを小雨が流れている。そんな春がもう来ているのだなあというのが歌意である。話者は、今まで、特に春を感じさせる出来事がなかったが、石仏が雨に打たれているのを見て、はっと春の訪れに気が付いたのだろう。「おとがひにこさめながる」は石仏が雨に打たれている情景をとらえてとても印象的である。「雨」は悲しい、寂しいというイメージがあるが、これは春のおとずれを軽くはずんでいる心を感じられる。ひらがなで表現されている点で春を感じさせるやさしさが感じられる。

「比較」自分の思い描いていた情景と同じでよかった。大岡信は「古都の懐かしさがしみじみ流れている。」と表現しているが、私は今までそんな風に感じなかったが、言われてみれば、ひらがなで表現されている所に古都の懐かしさを感じることがができる。

「優れたことば」 古都のなつかしさがしみじみ流れている。

MM女は、「鑑賞」を鑑賞文の書き方に基づいて書きまとめている。この歌に、「石仏が雨に打たれているのを見て、はつと春の訪れに気が付いた」話者の「軽くはずんでいる心」を読み取っている。「おとがひにこさめながるる」というこの歌の中心的表現を「印象的」とし、「ひらがなで表現されている点」に、「春を感じさせるやさしさ」を感じとっている。表現にやや未熟な点はあるが、よく歌の味わいとらえているといえる。「比較」の項を読めば、MM女は大岡信の鑑賞文に触発されて新たな読みに気づいている。「優れたことば」では、この歌を選んだ他の生徒たちと同じく優れた表現を的確にとらえている。

(三) 短歌鑑賞指導—発展

1 「私たちの選んだ百首」の作成

各クラスとも十のグループに分かれ、それぞれが「参考短歌」の一〇のテーマから一つのテーマを選択し、テーマのもとに集められた短歌から五首を選んだ。また、各自が自由に選んできた二首の短歌からグループ推薦の短歌五首を選び、計一〇首の短歌を選んだ。「参考短歌」には、宮柵二監修「ポケット 短歌その日その日」(一九八三年九月 平凡社刊)を用いた。そこから生徒の関心等を考慮して、①自然(一)―春・夏、②自然(二)―秋・冬、③自然(三)―月・星、④旅、⑤人生、⑥恋、⑦こころ―喜怒哀楽、⑧日々の暮らし、⑨政治・社会、⑩戦争、というテーマ

に沿って短歌を集め、活用した。

「参考短歌」からの推薦歌は、表現に難しさがあっても比較的意思の分かりやすい歌、情景を想像しやすい歌、情景の美しい歌、表現された心情が共感を覚えさせる歌、古典として知られている歌が選ばれているように見える。各自の選んだ短歌からの推薦は、百人一首、教科書、便覧に出ている古典短歌(和歌)が多く選ばれていた。人口に膾炙している短歌も多い。有名で何らかの形で心に残っている歌、心情的に共感しやすい歌、意味の分かりやすい歌、情景を想像しやすい歌が選ばれている。

2 鑑賞のことばに学ぶ

大岡信「折々の歌」から「第十折々の歌」までの一〇冊を四部揃え、生徒に一冊ずつ配布した。各一冊は、春夏秋冬の四季の歌から構成されている。出席番号一番の生徒に「折々の歌」の「春」の歌を対象とさせ、以下同様にして四〇番の生徒には「第十折々の歌」の「冬」の歌を対象とさせて、その中から生徒の最も惹かれた歌を二首選ばせた。ついで、歌を写させるとともに、大岡信の鑑賞文も写させ、優れた鑑賞の表現に傍線を引かせた。

この一連の学習によって、生徒は、①いくつものすぐれた短歌を目にすることができ、②心惹かれる短歌と出会い、③鑑賞文を読むことで自らのとらえた短歌鑑賞と比較し、新たな気づきを得ることもできる。さらに、④鑑賞文の優れた表現と出会うことも可能であろう。

三 短歌創作指導の実際

(一) 短歌創作指導の実際

短歌の創作は、次に掲げたプリント「短歌を創ろう」に基づいて行われた。まず、①二首以上の短歌創作。次に、②友達の評。③批評を参考に推敲、完成させて授業者に提出。④授業者は提出した短歌を読み、必要があれば返却し、推敲後再提出させる。⑤提出された短歌から、授業者は一首を選び、各クラスごとに「私たちの創った短歌」として集成する。以上が、指導の過程である。次に掲げたのは、SA男の提出したものである。

短歌を創ろう

二年(七)組()番 氏名(SA男)

1 短歌を二首以上創り、友達の見を書いてもらいなさい。

①	帰宅してテレビをつけて見ていると長野の歓声ひびきわたる
意見	少し単純な感じがする。その気持ちよく分かる。
②	来年の進路のことで悩むとき、ふと思いつ、友の一言
意見	友達から、すこく、心に残る一言を言われたのだと思う。何を言われたのか少し気になる。
③	長野での原田のジャンプ見て思うあきらめなければなんとかなると
意見	そのとおりだと思う。何事も最後までがんばればなんとかなる。「なんとかなると」が少しほかの言葉に対し、あつてないと思う。

2 友達の見に基づき、推敲して短歌を完成させなさい。

①	帰宅してテレビをつけると聞こえてくる選手を支える長野の歓声
②	来年の進路の事で悩むときふと思いつ友の一言
③	長野での原田のジャンプ見て思うあきらめなければきつとできると

これを見ると、創った三首の歌への友人の見を参考にして推敲し、短歌が完成されていることが分かる。

(二) 短歌作品の実際——「私たちの創った短歌」

次に、「私たちの創った短歌」の作品例を紹介する。

私たちの創った短歌

(二年七組)

- 1 毎日のがやく感じるここ最近ただ過ぎてゆく平凡な日々
池内達也
- 2 五年間、辛い練習乗り越えて最後に流す二つの涙
石村友昭
- 3 合宿の次の日死んだ祖母思う(い)僕にクラブをさせてくれたと
井上祐介
- 4 唯一の栄光の瞬間行かないで願い空しく流れる季節
江上卓
- 5 飯食えば必ず残るパセリの葉食べれぬものと思ひ決め

- り
- 6 高校の三年間というものはあつというまに終わってしま
う 河合達也
- 7 進路の本今まで見る気もなかつたがこのごろなぜか引き
寄せられる 川野替広
- 8 将来を思い悩むと辛くなる夢だけかつてに大きく膨らむ
楠葉 貴
- 9 ふざけるなだれができるかこんなもの怒りに任せて問題
集を投げる 小谷浩二
- 10 時計盤故障と思う春が来て僕の心は動いているのに
近土大輔
- 11 学期末古典や美術の提出物まとめてやるが悪い出来ばえ
重見弘之
- 12 (退学)
- 13 来年の進路のことでは悩むときふと思いつく友の一言
渋谷 篤
- 14 親類の受験の苦しみ耳にして次は我がためいきを吐く
立石陽介
- 15 本当の自分の気持ちとうらはらに勉強するも心はどこか
へ 田中理史
- 16 あと少し二年七組終わるのが もう会えないと思うと悲
し 中島久志
- 17 響きゆく心の中のジョン・レノンあなたが死んで僕は生
まれた 中元 聡

- 18 青葉散るわが学力に見切りつけ妥協と評し戸外を歩く
西 健太
- 19 春せまりまぶしい光りを浴びながら何を求める高校生活
町谷敬介
- 20 俄雨ケータイ遠距離長電話「今年は会えるん？」声がか
すれる 吉島達哉
- 21 暑い夏ライバルとともに戦ったボールを打つ音コートに
響く 赤木絵美
- 22 試験中「わかるものから」と言われても全部わからんム
ンクの叫び 安羅亘子
- 23 夢ばかりいつも見るのは夢ばかりかか現実されど現実
井田富子
- 24 小型犬玄関あけると飛んで来て買い主見上げ走りまわる
植田智加
- 25 引退まで二カ月あまり上達した後輩を見て寂しく思う
奥野真理子
- 26 こたつにて働く母のぐちを聞く子供も親もなやみは同じ
片山尚美
- 27 未提出
- 28 テスト前イライラの中我慢せず怒られるのを承知で遊ぶ
黒田綾乃
- 29 今日もまた遅刻のラインをさまよって自転車とばすあせ
りの毎日 小山真樹代
- 30 吾が今ここにいるのはなぜだろう何をするため生まれた

のだろう

妹尾友恵

31 テスト前友達と行くカラオケは楽しいけれど不安がよぎる
田坂華苗

32 ストープのぬくもりいでて赤々と一人励みて机に着けり
(いたれり)
田中裕子

33 七時過ぎ親父ばかりの下りの電車うるさいびき車内に響く
出口 愛

34 将来へはせる思いと不安とが背中合わせで心をめぐる
(まわる)
長岡亮子

35 友の死を突然聞きし我が胸に鈍い衝撃広がる波紋
濱 紘衣

36 一年の行事がすべて終了しあとはテストを残しているだけ(すだけ)
松本聖子

37 疲れてる毎日いつも疲れてるこのままずっと続く生活
(のかな)
三澤奈津子

38 金メダル冬の長野に輝きてかなうまじきは彼らの笑顔
(に)
御園真子

39 太陽に照らされ輝く水面に飛び込んで散る水しぶき
宮後かおり

40 何にでも心が動く十七歳時には無意味に泣きそうになる
宮花礼子

〈注 傍線部は指導者が添削した箇所、()内は添削前の生徒の表現。〉

ことばが熟さず、表現の整っていない短歌もある。形だけのものもないではない。しかし、生徒の短歌作品に接すると、表現の巧拙はあるにしても、高校生としての生活と、その生活における思いをまっすぐに見つめて短歌として表現したものが多くことに気づかされる。生徒が、短歌の学習をとおして、短歌に親しみ、短歌の表現になじみ、短歌が身近な生活と生活感情を映すものであることを学んだことが、そのような短歌を産み出すことにつながったのではないかと考える。なお、添削については、「せっかく自分でがんばって作った短歌をかってに変えないで欲しかった。」と書いている生徒がいた。

四 冊子「短歌を学ぶ―鑑賞と創作―」の作成

1 冊子「短歌を学ぶ」の作成

授業の最後に、学習の記録を冊子にまとめさせた。生徒が、学習の全体を振り返り、評価、反省することを求めていることである。

2 編集後記―学習を終えて

冊子の最後に「編集後記」を書かせた。①「短歌は奥深いものだなあと知らされた。」(HH女)②「どの短歌も言葉が厳選されていた」(KM男)、③「短歌でいろいろな題について創れるからすごくおもしろいと思った。授業で創ってすごく楽しかった。」

(YT女)、④「短歌が自由ですごく身近なものに感じられました。」(YK女)、⑤「短歌を通して、人々のいろいろな考え方がわかり、国語をとおして言えば、物の見方、考え方が変わったと

思う。」(YK男)⑥「味わい方や鑑賞文や多くの短歌を読むうちに短歌が、ことばの「一つ一つを大切にすばらしい芸術であることを発見した。」といった表現が見いだされた。生徒が、短歌の学習をとおして、短歌の奥深さ、短歌の厳選された言葉、ことばを大切にす芸術、短歌が自由で身近であること、短歌に表現された人々のいろいろな考え方等に気づき、理解し、認識していったことが理解される。また、短歌の創作についても、三十一文字に効果的に思いを込める難しさを触れるとともに、創作する楽しさを感じ取ったことも伝わってくる。これらの感想が多くの生徒の感想に重なっていると考える。

おわりに―考察のまとめと課題

以下、これまでの考察と学習目標とを関連させてまとめるとともに、今後の課題についても言及したい。

1 鑑賞法の理解

①音読、②歌意の理解、③話者の状況の理解、④話者の心情の把握(仮説)、⑤表現の検討、⑥話者の心情の感得、⑦作品のイメージの統合、という順序で鑑賞することを試みた。妥当な方法であったと考えるが、さらに、読み手の創造的な読みを反映させる方法も考えたい。

2 鑑賞文の記述―鑑賞の方法を生かす鑑賞文の書き方

鑑賞の方法に従って鑑賞文を書く方法を考えた。多くの生徒が鑑賞文の書き方に従って、鑑賞文を書き、優れた鑑賞文も見られ

た。鑑賞文の書き方として確立したい。

3 短歌の実感的理解

木俣修「短歌について」を読ませ、「短歌」とは何か、その表現の特色、短歌を読む意味や短歌を作る意味についてまとめさせた。しかし、それが、実感的に理解されるには、多くの短歌に触れる必要があったと考える。生徒は、この学習の全体をとおして、実感的な理解を得ていったものと思われる。

4 ものの見方、考え方、感じ方の理解

「短歌について」、「その子二十」、「折々の歌」の関連鑑賞文、「私たちの選んだ百首」のテーマごとに集められた参考短歌、自選短歌、「私たちの創った短歌」、その他折に触れて紹介した短歌と、多くの短歌を目にし、様々なものの方、考え方、感じ方に触れ、理解を広げ、深めたものと推測する。「編集後記」の一部にそのような生徒の記述もあった。

5 短歌の創作

生徒は、積極的に短歌の創作に取り組んだ。生徒作品には、表現の巧拙はあるが、高校生としての生活と、時々思いをまっすぐに見つけて表現したものが見られた。相互批評による推敲と作品集の作成などが積極性を喚起したと考えられる。また、生徒が、短歌の学習をとおして、短歌に親しみ、短歌の表現になじみ、短歌が身近な生活と生活感情を映すものであることを学んだことが、そのような短歌を産み出すことにつながったのではないかと考える。

6 短歌への親しみ

「編集後記」からも、短歌への親しみは感じ取れる。折に触れ

て、高校生の短歌や高校生の生活や思いを詠んだ短歌も紹介した。身近な生活から生まれた短歌にも多く接した。また、自ら創作も試みた。このようなことが、短歌への親しみを増したものと考える。

7 ことばへの関心の深化

大岡信の鑑賞文と比較し、気づきを述べさせる指導、大岡信の鑑賞文の優れた表現を抜き出させる指導、優れた鑑賞文を書写させ、その優れた表現に学ばせる指導などを行った。また、短歌の創作は、否応なくことばと向き合わせる。「編集後記」には、短歌におけることばへの認識の深まりをうかがわせるものも見いだされた。このような学習とおして、生徒のことばへの関心は深まったと考える。

以上から、短歌の学習指導として、以下のことが有効ではないかとの感触を得た。

- ① 短歌を学ぶ意味は、実感的に理解させることが必要。
- ② 鑑賞指導のために鑑賞方法も学ばせる。
- ③ 鑑賞の深化は、専門家の鑑賞、生徒の鑑賞などを相互に比較することを得られる。
- ④ 主体的な学習のためには、ア・鑑賞方法を学ばせる、イ・個別、グループなどの学習形態を生かし、自らの関心のある短歌作品を選ばせたり、鑑賞させたりする、ウ・生徒の鑑賞文、短歌作品を教材化することで学習意欲を喚起する、エ・冊子作りなど学習の全体を記録させる、ことが有効である。
- ⑤ 短歌の創作のためには、創る意味の実感的理解、とともに興味・関心、意欲を時間をかけて育てることが必要。

⑥ 短歌の学習をおしてことばに対する関心を高めることができる。また、ことばの量を増やすこともできる。

(大阪府立和泉高等学校)